唐の公主と『懐風藻』

加藤有子

はじめに

『懐風藻』の成立した天平勝宝三（七五一）年というのは東アジアにとってどのような時代であったか。

当時東アジアの中心として栄えた唐は玄宗の善政期「開元の治」が終わり、天宝年間となっていた。天宝元年には安禄山が平盧節度使になり、また四年には楊太真が楊貴妃となって、天宝十四（七五五）年に起こった安史の乱の前夜ともいうべき時代である。(注1)

文化的には、唐初の貞観時代から、続く則天武后時代の後、玄宗の即位によって文化の花開いた時代、その後半にあたる。詩においては「盛唐」と呼ばれる。

従来より、中国の文献が日本への文献への影響関係に至るまでには、当時はおおよそ三十年が必要だったといわれている。仮にそれに従ってみると『懐風藻』に影響を与え得るのは七二〇年頃までとなる。日本では『日本書紀』が完成した頃であるが、唐では開元九年、張説が宰相になった頃である。

本稿では、唐の文学と『懐風藻』とを、その玄宗の直前にあたる中宗と則天武后の時代に焦点をしぼって比較してみたい。

中でも、本稿で比較したいのは、中宗の文壇の詩人達のあり方と『懐風藻』の詩人達である。もちろん詩の内容も考察したい。中宗の文壇に関しては、福田俊昭氏が、

> 中宗は事あるごとに大学士・学士・直学士等の詩人を伴って行幸したり、宮廷で宴会を催し、その度ごとに詩を賦詠し、それに臣下が唱和した。

という。(注2)『懐風藻』も非常に宴詩が多い。中宗の文壇は多くの詩宴の記録も残しているが、本稿で目を引いたのは、当時

の公主達（皇女達）と詩宴との関係である。中宗の頃の公主として、太平公主・安楽公主・長寧公主・金城公主などが目をひく。中宗はこれらの公主の元に行幸したり、宴を開くなどし、多くの臣下に詩を作らせ、現在も残るものが多い。その中宗代の行幸や詩宴の際の詩文が、少なからず日本にも伝来していたと考えられる。

本稿では、中宗代の公主たちをめぐって作られた詩文と『懐風藻』を中心とする日本文学との比較を試みたいと考えている。

第一節　金城公主と釈弁正の「与朝主人」詩

唐の公主をめぐって作られた詩歌と『懐風藻』詩との比較を最初に論じたのは、高潤生氏であろう。高氏は唐の金城公主をめぐる詩群と『懐風藻』詩番二六の釈弁正の「与朝主人」詩について詳細な比較と影響関係を論じている。まず、詩番二六の釈弁正の詩をあげる。

五言。与朝主人。一首。　釋辨正

鐘鼓沸城闉。戎蕃預國親。神明今漢主。柔遠靜胡塵。
琴歌馬上怨。楊柳曲中春。唯有關山月。偏迎北塞人。

高氏の論文では、右の詩が初唐の「送金城公主」詩群から影響を受けたとするものだ。金城公主とは、唐の中宗の頃の和蕃公主である。和蕃公主とは、唐が吐蕃（チベット）と友好関係の為に吐蕃の王に嫁させた皇女達のことである。高潤生氏によると「金城公主が吐蕃に嫁ぐ景龍四年は、弁正の在唐七年目にあたる」という。[注2] その金城公主が嫁ぐ際に作られた多くの詩が「送金城公主」詩群である。高氏の論文の概要としては、

弁正の「与朝主人」詩は、吐蕃へ嫁いだ金城公主のことについて詠じた詩だと思う。詩の構成形式―（一）和親政策への賞賛、（二）惜別の情景の描写。（三）入蕃道中の風景、和蕃公主の心境への想像による詠嘆―と詩語の表現の特色は、主に「送金城公主」詩群から影響を受けたであろう。この詩は、たぶん景龍四年（七一〇）頃、金城公主が入蕃してからまもなく弁正が滞在している旅館で作り、そして親しくなった朝氏という旅館の主人に与えたものではないだろうか。

とある。[注3] 本稿では高氏の指摘する金城公主の詩群の中で、特に右に引用した釈弁正の「与朝主人」詩に関する詩のみ引用する（『全唐詩』では詩題を「奉和送金城公主適西蕃應制」とする）。

A、奉和送金城公主適西蕃應制　李嶠

漢帝撫戎臣、絲言命錦輪。還將弄機女、遠嫁織皮人。
曲怨關山月、妝消道路塵。所嗟穠李樹、空對小榆春。

B、奉和送金城公主適西蕃應制　韋元旦

柔遠安夷俗、和親重漢年。軍容旌節送、國命錦車傳。
琴曲悲千里、簫聲戀九天。唯應西海月、來就掌珠圓。

C、奉和送金城公主入西蕃應制　劉憲

外館踰河右、行營指路岐。和親悲遠嫁、忍愛泣將離。
旌旆羌風引、軒車漢月隨。那堪馬上曲、時向管中吹。

D、奉和送金城公主適西蕃應制　薛稷

天道寧殊俗、慈仁乃戢兵。懷荒寄赤子、忍愛鞠蒼生。
月下瓊娥去、星分寶婺行。關山馬上曲、相送不勝情。

E、奉和送金城公主適西蕃應制　徐堅

星漢下天孫、車服降殊蕃。匣中詞易切、馬上曲虛繁。
關塞移朱帳、風塵暗錦軒。簫聲去日遠、萬里望河源。

釈弁正の「与朝主人」と「送金城公主」詩群の語句の解説に関しては、高氏による詳細な論究があり、本稿では簡単な比較にとどめたい。端的に言って、釈弁正の「与朝主人」の初句・六句・結句に関しては「送金城公主」詩群に類語を見ないが、二句～五句、七句目に関してはほぼ「送金城公主」詩群に類語を見ることができる。まず、「与朝主人」詩の第三句・四句目は、

「神明今漢主。柔遠靜胡塵」（弁正詩）
「柔遠安夷俗、和親重漢年」（B詩）

というような類似がある。しかしこれのみでは、単に類似しているというだけである。また、右以外にも第五句、

「琴歌馬上怨」（弁正詩）
「那堪馬上曲」（C詩）
「馬上曲虛繁」（E詩）

とあり、第七句目に関しては、

「唯有關山月」（弁正詩）
「曲怨關山月」（A詩）
「關山馬上曲」（D詩）

といった類似を見ることができる。この「關山月」に関しては、全く別の唐詩、柳中庸の「秋怨」詩にも「漢壘關山月、胡笳塞北天」などとある。

釈弁正詩の第五句目「琴歌馬上怨」・七句目「唯有關山月」、と「送金城公主」詩群の類似箇所、そしてこの「秋怨」詩などの表現はともに、王昭君の故事を描く楽府題の流れを汲む表現と言える。王昭君も漢の元帝の時代に匈奴に嫁いだ女性

であり、後に多くの文学表現が派生している。

右にあげた比較を見る限り、釈弁正の「与朝主人」詩は「送金城公主」詩群を知った上での表現であると見て間違いないだろう。しかし、本稿では、「与朝主人」詩そのものも、金城公主のことを詠んだとする高潤生氏の意見にはやや疑問を呈したい。

例えば、『懐風藻』の伝や詩序などは、同時代の中国文献の表現を元に表現した部分、それ以前の中国の出典をもとに表現した部分、そして残った自作の部分といったように、いわば典拠を元に、『懐風藻』の表現を作り上げようとしている傾向が強い。(注5) 本詩もそれに類するのではないかと考えている。典拠としては「送金城公主」詩群を用いながら、それを元に新たに「与朝主人」詩を作り上げているはずである。

また、言い方を変えると、「送金城公主」詩群を和歌で言う「本歌」ならぬ「本詩」として用いた「本歌（詩）取り」の詩のように考えられまいか（ここでいう「本歌」とは、たとえとして用いている。実物とは異なる）。つまり、「本歌（詩）」は金城公主のことを詠じているが、弁正詩の主題は「本」を響かせながら別にあると見るべきだと考えている。この詩の解釈に関しては、「送金城公主」の別離の情を響かせた上で、おおまかな意味は従来の解釈に戻るべきだと考えている。

本稿の主眼は「唐の公主」であるため、本稿では、最も問題にされている釈弁正詩の詩題「与朝主人」に関してのみ触れるにとどめたい。「与朝主人」という詩題に関して、高潤生氏は、

> 漢詩の中には「与」を動詞として用いられる「与×××」風の詩題は極めて少ない。（中略）人におくる意の動詞の語感と比べると、丁寧さが欠けるのである。もし、詩題に「与×××」としたら、その詩を送られた人は、作者との関係が随分親しいか、或いは地位が低いか、目下の人かとまず考えられる。

とし、(注6)「朝氏という旅館の主人に与えたもの」とする。以後の注釈もそれに従っている。(注7) 稿者は高氏の論を中国詩で確認してみたが、「与～」の要素に関しては、従来説に加えるものは見いだせなかった。ところが、「主人」に関しては、多少異論が生まれた。

漢から六朝期にかけて、「主人」を題に用いた詩は四例ほどである。それに対して唐詩では五十三例あるが、いずれも「与～主人」といった用例ではない。「主人」を用いた唐詩の詩題を分類すると、

「題～主人」詩……七例
「贈～主人」詩……六例

「上～主人」詩……五例
「寄～主人」詩……四例
「宿～主人」詩……三例
「別～主人」詩……三例
「謝～主人」詩……二例
「代～主人」詩……二例
その他「主人」のつく詩…二十一例

となる。詩題における「主人」の用法は高潤生氏のいう「旅館の主人」の意味合いもあるが、用例を見ていくとそればかりではない。むしろ、旧主の意味で用いる「主人」や、『世説新語』を元にした賀知章の詩などに見られる名園を極賞した語として著名な「主人不相識、偶座為林泉」[注5]などのように、作詩の場である庭園や宴席の「主人」を表現する例も多い。稿者は、「宴の主人」ぐらいの意味合いで考えている。

また、小島憲之の言及にもあるように[注6]、「朝主人」を朝衡こと安部仲麿を指すという指摘も考慮に入れるべきである。王維の「送祕書晁監還日本國」詩に、「鄉樹扶桑外、主人孤島中。別離方異域、音信若為通」とある。王維が朝衡（安部仲麿）に対して「主人」を用いている。もちろん、金城公主の入蕃が景龍四（七一〇）年であり、高氏が論じるようにその際に作ったと解釈した場合は、影響関係は全く生まれてこない。しかし、先に述べたように、本稿では「送金城公主」詩群の表現を取り入れながら、新しい表現をつくりあげようとしていると解釈している。景龍四（七一〇）年のその入蕃の宴の直後に作ったとは考えない。

また、安部仲麻呂が帰国の途についたのは天平勝宝五（七五三）年のことであり、『懐風藻』成立と前後する。右の王維の詩が直接関与した可能性は、年代のみ追っていくと難しい。現段階では朝衡（安部仲麿）を「主人」と用いる根拠が、当時の唐詩文の中に他にあったはずだと推測するしかない。

そもそも従来からの疑問として、『懐風藻』の成立も序文の通りかという問題がある。また、詩題の成立が作詩と同時でない可能性も考えられる。更に「与朝主人」詩が本当に中国本土で作られたのか、「伝・釈弁正詩」ではないのかという考えも必要であると思っている。

本節では、唐の中宗の頃の公主である「金城公主」が入蕃の際に作られた「送金城公主」詩群と、『懐風藻』詩番二六の釈弁正「与朝主人」詩との関係について論じた。高潤生氏が「金城公主」のことを詠んだ詩と解釈するのに対して、本稿では「送金城公主」詩群を典拠としながら、新しい表現をつくりあげようとした作品であるとした。また、「与朝主人」という詩題においても、「旅館の主人」ではなく、「宴の主人」という考え方を示した。

何より、本稿の論旨としては、中宗の頃の侍宴詩と『懐風藻』詩との影響関係である。少なくとも、「金城公主」詩群

は、まとまって日本人の目に触れることができるほど、中国で、或いは日本でも伝搬していた事は確かである。「金城公主」詩群は明らかに「詩群」として、釈弁正「与朝主人」詩に影響を与えている。このような詩群の、日本への伝搬形式に関しても今後、課題にする必要性を感じる。

第二節　太平公主と「鵲橋」

本節で比較を試みるのは、前稿「かささぎの渡せる橋に置く霜の―比較文学的立場から―」(注10)において言及した「幸太平公主」詩群と『懐風藻』詩番三三番・五六番詩に見られる「鵲影」「鵲橋」、更に『百人一首』の大伴家持歌の「かささぎのわたせるはし」についてである。この論文では『懐風藻』の該当詩、

五言。七夕。一首。　贈正一位太政大臣藤原朝臣史

雲衣兩觀夕。月鏡一逢秋。機下非曾故。梭息是威猷。
鳳蓋隨風轉。鵲影逐波浮。面前開短樂。別後悲長愁。

五言。七夕。一首。　従五位下出雲介吉智首

冉冉逝不留。時節忽驚秋。菊風披夕霧。桂月照蘭洲。
仙車渡鵲橋。神駕越清流。天庭陳相喜。華閣釋離愁。
河横天欲曙。更歎後期悠。

の二首の「七夕」詩と、『百人一首』他に所収の、中納言家持の、

かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

との季節感に関して論じた。その際、同じく「鵲橋」(「鵲影」)、「かささぎのわたせるはし」を詠み込みながら『懐風藻』詩では「逢秋」「驚秋」というように、秋の到来を詠み込むのに対して、家持歌では一般に晩秋や冬に多い「霜」を詠み込むという違いについて考察した。

その際、多くの中国の詩をあげて「鵲橋」を考えてみたが、「鵲橋」が詠み込まれる詩のほとんどは「七夕」を詩題に持ち、内容的にも七夕詩とよめる歌である。右にあげた『懐風藻』出雲介吉智首の「鵲橋」も詩題は「七夕」であり、「初秋」の詩である。出雲介吉智首の「七夕」詩は、唐詩のほとんどの「鵲橋」の詠み方に反しない。藤原史詩の「鵲影」は「七夕」を詩題に持ちながら、微妙に唐詩の「鵲影」と違いがあることを例示して説明した。更に、大伴家持歌の「かささぎのわたせるはし」のように「霜」と共に「鵲橋」を詠むは非常に少ない。

いずれにせよ中国の「鵲橋」は詩語として用いられる場合は「七夕」詩がほとんどである。そのような「鵲橋」と「七夕」詩の用例群の中で、例外がある。多くの「鵲橋」の用例

の中で異彩をはなつのが、「奉和初春幸太平公主南莊應制」詩群である。この詩群は「春初」とあるように、通常の「七夕」詩とは異なる季節感の中に「鵲橋」を詠み込んでいる。この詩群は全体として太平公主の「南莊」を仙境や天上世界として表現しているが、その約九首中、半数の詩に「烏鵲」「鵲橋」が詠み込まれている。それらの詩を抜粋して示す。

1「奉和初春幸太平公主南莊應制」　李嶠

主家山第接雲開、天子春遊動地來。
羽騎參差花外轉、霓旌搖曳日邊回。
還將石溜調琴曲、更取峰霞入酒杯。
鸞輅已辭烏鵲渚、簫聲猶繞鳳皇臺。

2「奉和初春幸太平公主南莊應制」　蘇頲（沈佺期）

主第山門起灞川、宸遊風景入初年。
鳳皇樓下交天仗、烏鵲橋頭敞御筵。
往往花間逢綵石、時時竹裏見紅泉。
今朝扈蹕平陽館、不羨乘槎雲漢邊。

3「奉和初春幸太平公主南莊應制」　韋嗣立（趙彦昭）

主第巖扃架鵲橋、天門閶闔降鸞鑣。
歷亂旌旗轉雲樹、參差臺榭入煙霄。
林間花雜平陽舞、谷裏鶯和弄玉簫。
已陪沁水追歡日、行奉茅山訪道朝。

4「奉和初春幸太平公主南莊應制」　李邕

傳聞銀漢支機石、復見金輿出紫微。
織女橋邊烏鵲起、仙人樓上鳳皇飛。
流風入座飄歌扇、瀑水侵階濺舞衣。
今日還同犯牛斗、乘槎共逐海潮歸。

右の詩群は景龍三（七〇九）年二月十一日、中宗の時代、則天武后が没して四年後に作られたものである。太平公主は則天武后の娘で、武后がことのほかかわいがり、その才能性格も武后に似ていたといわれる人物という。(注11) この三年後には玄宗が即位しており、それと共に太平公主は玄宗に誅されてしまう。また、右の1～4の詩人達は則天武后の時代の宮廷文化を担う詩人達である。日本にも影響はあったと考えられる。中でも李嶠の詩の多くは日本においても古くから愛誦されていたと思われ、後に嵯峨天皇もその詩を筆跡として残している。

本稿では、そのような則天武后から中宗の頃に成立した「太平公主」の「南莊」で作られたとされる宴詩である。本稿では「鵲橋」を意味する該当部だけ抽出して説明する。

1、李嶠　「鸞輅已辭烏鵲渚、簫聲猶繞鳳皇臺」
2、蘇頲　「鳳皇樓下交天仗、烏鵲橋頭敞御筵」
3、韋嗣立「主第巖扃架鵲橋、天門閶闔降鸞鑣」
4、李邕　「織女橋邊烏鵲起、仙人樓上鳳皇飛。」

右の引用部分は特に太平公主の南荘を天上世界や仙界として描いている。「鵲橋」の対として1・2・4に「鳳皇」、3に「鸞鑣」などという伝説上の鳥を用いている点も興味深い。『懐風藻』詩にも「鳳」や「鸞」は詩や詩序に度々用いられている。詩作に用いられる祥瑞としてのそれらの鳥たちは、その宴や詩作の場をほめたたえるための常套句として用いられている。また、伝説上の鳥に限定しなくとも、貴人の居る場所を仙境や天上世界とたとえるのは、初唐の「応詔」「応制」詩のパターンと言えるかも知れない。これも『懐風藻』詩にもよく見られる。

先に述べたように『懐風藻』の「鵲橋」は他の中国詩における用法と異ならず、「七夕」詩である。本稿での問題点は家持歌の「かささぎのわたせるはし」の表現世界が一致するのは、おそらく現存する唐詩では「幸太平公主」詩群に限定される点だ。

従来より、日本古代文学における「かささぎ」の自体が、実際目にして表現されるのではなく、中国文学の影響から表現されてきたと言われてきている。(注12) 前稿において、その点は確認した。本稿では前稿で触れなかった「幸太平公主」詩群と家持歌との影響関係に関して加えてみたい。

家持歌が「七夕」歌か否かという論議は古くからの問題点でもある。諸説あるが、私は「七夕」歌ではないと考えている。前稿にも論じたが、右の家持歌とは別の流れとして、中国詩一般に見られるような「七夕」歌としての「かささぎのはし」を詠み込む詠歌の流れが日本にも存在する。しかし、家持以降の和歌の「かささぎのわたせるはし」は、この「幸太平公主」詩群の「鵲橋」ように、貴人の邸宅を仙境や天上世界にたとえている例も多い。これは『大和物語』所収の壬生忠岑歌「かささぎのわたせるはしの霜の上を夜半にふみわけことさらにこそ」の「かささぎのわたせるはし」を新全集が「宮中や貴人の邸宅を天上になぞらえて、その階段をいうようになる」と注する流れである。(注13)

また、家持歌の成立時期の問題も大きい。右の家持歌は『万葉集』や家持の同時代の資料にはない。家持自作は古くから疑われている。当該歌を所収する『家持集』の成立は『拾遺集』成立頃だという。(注14) 家持の死（七八五年）後、『家持集』の成立までの間に、「幸太平公主」詩群（七〇九年）が歌の成立に関与した可能性は全く否定することはできないだろう。

また、『源氏物語』で「長恨歌」が引かれているように、平安期の文化人にとって唐の玄宗への興味は非常に大きかったと言える。その玄宗が即位して真っ先に行ったのが太平公主を誅することである。当時の文化人においても太平公主に対する興味もあったろう。

補足として、本節の冒頭にあげた藤原史の「七夕」詩は詩の内容からも「七夕」詩であることは間違いないない。しか

し唐詩において「鵲影」は一例を除き全て「七夕」詩以外の作品に用いられている。また中唐以降の例しか管見にして見いだせない。

この詩も、前掲家持歌と同じように藤原史実作ではない可能性も考えられる。平安期に成立の私家集『人麿集』『家持集』などの持つ作者問題・成立問題や、『万葉集』に関して論じられる「仮託歌」という概念が、『懐風藻』にも部分あてはまるものと私は考えている。それらの問題に関して、今後更に詳説が必要となるだろう。

本節では、『懐風藻』詩番三三番・五六番詩に見られる「鵲影」「鵲橋」と『百人一首』の大伴家持歌の「かささぎのわたせるはし」について、中宗の頃の「幸太平公主」詩群との比較から論じてみた。本節の基礎資料としては前稿にて論じたため、本稿では「幸太平公主」の詩群を例示したかったのがおおもとにある。私は第一節で述べた「送金城公主」詩群同様に「幸太平公主」詩群も、日本に渡っていたと考えている。しかし、「送金城公主」詩群がその大部分をもって「与朝主人」詩の成立に関与しているのと異なり、「幸太平公主」詩群においては、必ずしも詩群である必要性はない。日本への唐詩の伝搬のあり方はどのようなものであったろうか。

第三節　長寧公主と葛野王の「遊龍門山」詩

本節において論じたいのは『懐風藻』詩番一一番の葛野王の詩と、長寧公主の詩群との比較である。また、詩題の「龍門山」に関しても触れてみたい。詩題に関しては、かつて「日中比較文学研究会」において発表したことがある。(注15) その際は則天武后の「龍門」への行幸と「遊龍門山」詩との関連に関して疑問を投げかけたにすぎなかった。本稿ではそこから少し歩をすすめてみたいと考えている。まずは、葛野王の詩をあげる。

五言。遊龍門山。一首。　葛野王

命駕遊山水。長忘冠冕情。安得王喬道。控鶴入蓬瀛。

この詩の詩題の「龍門山」とは、吉野河の北に位置する山地をいう。奈良盆地と吉野地方を境とするため、峠越えの諸道が通じ、文武朝には飛鳥と吉野離宮を結ぶ主要ルートであった。「龍門山」が日本の文献に登場するのは葛野王の当該詩が最も早い例と言えるが、当地は早くから「龍門山」と呼ばれていたと推測されてきている。(注16)

この山地が「龍門山」という名を持つのには、少なからず中国文学の影響があったであろう。中国の「龍門」は、古くは禹の治水の際、黄河の水を鑿ち通じさせたといわれ、多くの文献にその伝説が記される。また、「登龍門」の語も有名である。流れが激しく、魚類はここから上流に進めず、一たび上れば龍に変ずるという故事を持ち、進士の試験や声望の

高い人物を指すのに用いられるようになる。[注17] 六朝までの文学においてはそれらの伝承を取り込んで表現する例が数多く残されている。

それに対し、唐に入ると、実際に皇帝らが行幸し、応制詩が残されてゆく。『旧唐書』には高宗・中宗・玄宗などの「龍門」への行幸の記録を見ることができる。なかでも中宗の例では、神龍元（七〇五）年冬十月条に、「癸亥、幸龍門香山寺。乙丑、幸新安。改弘文館為修文館」とある。[注18] 余談だが大学士や学士、直学士で構成される「弘文館」を「修文館」へ改めた記述が続くのが興味深い。中宗はこの「修文館」の構成員や近臣を伴って各地を遊幸し、詩宴を作ったという。

また、時代は前後するが初唐・宋之問の「龍門応制」詩は則天武后の時代の行幸に於ける作詩である。後代に編まれた『唐詩記事』によると、

武后遊龍門、命羣官賦詩、先成者賜以錦袍。左史東方虬詩成、拜賜。坐未安、之問詩後成。文理兼美、左右莫不稱善。乃就奪錦袍衣之。

と見られるように、[注19] 則天武后（六二三～七〇五）の「遊龍門」に陪した際に作られたものである。右引用には群官に賦詩を命じたとある。中宗に限らず則天武后も行幸と詩宴の記録がのこされており、「龍門」に限らず、九視元（七〇〇）年五月にも名勝地「石淙」に遊んだ際の詩宴の詩群も残されている。しかし、宋之問らの詩の内容からは直接、葛野王の「遊龍門山」の内容を解釈する要素を見いだせない。それ以後も唐詩には「遊龍門～」を詩題に持つ例は多いが、それらの「遊龍門～」詩においても詩内容に関しては葛野王詩との比較の糸口がない。しかし、唐詩の詩題としては「遊龍門～」は定着している。

また、右に見たように君主の「龍門」行幸の際の詩歌が目を引く。この頃の日本における唐文化の影響は非常に大きい。葛野王の「遊龍門山」という詩題が生まれた際、唐の「龍門」での詩「遊龍門～」が全く頭をよぎらなかったほど無知ではなかったであろう。また、日本の「龍門山」の使用例は葛野王が最初となる。果たして、中国文学の影響はなはだしい時代に、この名は偶発的に起きたのであろうか。現在においてはそれを確かめる用例を見いだせない。影響関係はあくまでも想像の範囲にとどまるものである。

ところで、本節ではここまで「龍門」の地名とそれに関する詩宴について論じてきた。最大の問題となる葛野王の「遊龍門山」の詩内容は比較文学的にどのような位置にあるのであろうか。先に「龍門～」を詩題に持つ唐詩と葛野王の「遊龍門山」との詩内容は異なることを述べた。では、葛野王の詩内容は中国詩との直接的な影響関係がない作品と言えるだろうか。調査をしてゆくと、また違った側面が見える。やは

り中国の詩に構造上、類似する作品を見ることができるのだ。比較のために再び葛野王の詩と、その詩をあげる。

五言。遊龍門山。一首。　葛野王

a命駕遊山水。長忘冠冕情。安得王喬道。控鶴入蓬瀛。

遊長寧公主流杯池二十五首　上官昭容

b暫遊仁智所、蕭然松桂情。寄言棲遯客、勿復訪蓬瀛。

構造上、非常に近似しているのがわかるだろうか。第一句目、葛野王の「遊山水」に対し上官昭容の「遊仁智」とある。この句は『論語』「雍也」の「山水仁智」を知っていれば、或いは六朝から唐までの山水詩を読んだことがある者ならば、当然同じ意味を指すことがわかる。『懐風藻』全体を見ても「山水仁智」を用いた表現は数多くある。また、二句目「冠冕情」と「松桂情」は同じく「情」でまとめており、三句目の「王喬」は「王子喬」のことで世を遁れた仙人として名高い。「遯客」の「遯」は「遁」に同じ。「隠遁」や「遁世」する客である。類似の意味をもつ。四句目は「入蓬瀛」と「訪蓬瀛」とはほぼ同じ意味である。全体の意味をだいたい比較すると、

a車駕を命じて山水自然の間に遊覧すると、役人として

の思いを長く忘れることだ。どのようにしたら仙人の王子喬の道を得て、鶴に乗って神仙の棲む蓬瀛の山に入れるだろうか。

b暫く山水仁智の自然の所に遊覧すると、松桂のような堅い信頼の思いがさわがしくわいてくる。隠棲した客にまた蓬瀛を訪れることが無いよう言っておくれ。

といったように、内容は全く違う。a葛野王が神仙郷に入ることを願う詩なのに対し、b上官昭容は神仙郷を再び訪ねることを「勿れ」とよむ。

先に「送金城公主」詩群と釈弁正詩との比較でも述べたが、稿者は『懐風藻』の詩風としては、明確な出典の用語を用いながら、新しい表現に向かってゆこうとしていると考えている。この詩に関しても同じである。構造と表現の一部を借りながら、内容は葛野王の詩として完成しているのである。この「遊長寧公主流杯池」については、『唐詩紀事』に、

長寧公主、韋庶人所生、下嫁楊愼交。皇帝制曰、駙馬都尉觀國公楊愼交。分榮戚里、藉寵公門。恭肅著於立身、協勤效於從政。鳳皇樓上、宛符琴瑟之歡、烏鵲橋前、載協松蘿之契。宜分覃茅土、式廣山河、造第於東都、府財幾竭、又取西京高士廉第、左金吾衛廢營。合為宅、作三重樓、築山浚池。帝及后數臨幸、置酒賦詩、羣臣屬和。

とある。(注30) この宴には中宗も行幸していたと思われる。また、「帝及后數臨幸、置酒賦詩、羣臣屬和」とあるように、群臣も詩作しているが、現在は『全唐詩』などに見いだせない、おそらく現存しないだけで詩群があったであろうと推測する。

長寧公主は中宗の娘で、右の詩群の他にも景龍三（七〇九）年十一月、中宗の誕生日と長寧公主の出産一ヶ月の祝いの詩宴の詩群が残されており、また景龍四（七一〇）年四月の「侍宴長寧公主東莊應制」詩群が残されている。これら詩群から当時の長寧公主と中宗の詩宴が見えてくる。それらの前後に、この「遊長寧公主流杯池二十五首」詩群も位置する。

本節では葛野王の「遊龍門山」の詩題について、唐詩では「遊龍門」を含む詩題は多くあり、詩題としての「遊龍門山」の持つ意味は、実は淵源があるのではないかと推測した。また、詩内容に関しては、中宗の娘・長寧公主の園池にて遊覧した際の「遊長寧公主流杯池」詩群が関与していると指摘した。葛野王詩も、唐の中宗の頃の詩群が作詩に関与していると見て間違いはないだろう。

おわりに

本稿では、中国の文献が日本の文献へ影響関係に至るまでに、おおよそ三十年が必要だったと言われていることから、初唐の七二〇年頃までの文献が『懐風藻』成立までに影響関係を論じることができるとみて、中宗と則天武后の時代の文学に焦点をしぼって『懐風藻』の詩と比較した。中でも、本稿で論じたのは、中宗の文壇と詩人、そして詩そのものが、『懐風藻』にどう影響を与えているかである。

第一節で述べた、中宗の景龍四（七一〇）年に作られた「送金城公主」詩群と釈弁正「与朝主人」詩の比較に関しては夙に高潤生氏の比較が詳しい。本稿ではそれを引き継ぎ、詩題に関してのみ論を加えた。

第二節では、中宗の景龍三（七〇九）年に作られた「幸太平公主」詩群と藤原史・吉智首の「七夕」詩の「鵲影」「鵲橋」や大伴家持の歌語「かささぎのわたせるはし」との関係に触れた。前稿において基礎的な比較を示したため、本稿では公主の詩群を例示することに目的があった。

第三節では、中宗の景龍年間に作られたと思われる、「長寧公主」詩群と葛野王「遊龍門山」詩とを比較した。詩全体の構造と詩の一部が非常に似通っており、「長寧公主」詩群は葛野王「遊龍門山」に影響をあたえていると言えるだろう。また、則天武后や中宗の時代「龍門」における行幸や詩宴が行われてきたことにも触れた。

第一節から第三節まで論じてきたことによって、中宗の代の宴詩の詩群がまとまって、早くから日本に伝搬していたと考えるのが本稿の論旨である。そして伝搬と同時に、非常に強い影響力をもたらしたと思われる。『懐風藻』詩は詩文として中国詩の影響が非常に強いことは当然である。加えて第

二節で述べた家持歌のように和歌の世界にも影響をあたえていたのではないかと稿者は見ている。

〈注〉

※本稿の『懐風藻』の引用は全て古典文学大系『懐風藻』（岩波書店）による。唐詩の引用は『全唐詩』（中華書局）による。

※また唐詩の調査に関しては台湾の「故宮【寒泉】古典文獻全文検索資料庫」の検索データを参考にさせていただいた。

（1）布目潮渢・栗原益男著『隋唐帝国』（講談社）

（2）福田俊昭『李嶠と雑詠詩の研究』（汲古書院）

（3）高潤生「『懐風藻』と中国文学―釈弁正「与朝主人」詩考―」『皇學館論叢』第二十七巻第五号

（4）注（3）に同じ

（5）拙稿「『懐風藻』の序と中国文学の序」『懐風藻研究』第5号（日中比較文学研究会）

（6）注（3）に同じ

（7）辰巳正明『懐風藻全注釈』（笠間書院）

（8）『世説新語』「簡傲」（目加田誠著『世説新語』下（明治書院））。盛唐・賀知章（六五九～七四四）の「題袁氏別業」詩は「一作」で「偶遊主人園」詩という題も持つ。

（9）小島憲之「月報」古典文学大系『懐風藻』（岩波書店）王維の詩中の「主人」の意味に関しては朝衡（安部仲麿）自身を指す論と天皇を指す論とがあるが、稿者は朝衡と解す。

（10）拙稿「かささぎの渡せる橋に置く霜の―比較文学的立場から―」『日本文学研究』第五十三号

（11）注（1）に同じ

（12）片桐洋一著『歌枕歌ことば辞典』（笠間書院）

（13）高橋正治他・新編日本古典文学全集『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平仲物語』（小学館）

（14）島田良二「解題」『私家集大成』中古Ⅰ（明治書院）他

（15）日中比較文学研究会、平成一四年七月の発表による

（16）『地名大辞典』（角川書店）

（17）孟慶遠主編『中国歴史文化事典』（新潮社）

（18）劉昫主編『舊唐書』（中華書局）

（19）計有功『唐詩紀事』（上海古籍出版社）

（20）注（19）に同じ